かな書き方式の失敗

昭和 31 年 4 月、わたしはふたたび一年生を受け持ちました。今度は、三年間の指導経験を積んでいるので、一年生の扱い方もよくわかり、自信をもって子どもたちを導くことができました。それに、前回よりも幸いだったことは、校舎が増築され、二部授業がなくなったことでした。授業時間数も、前回に比べると、二倍近くふえました。条件は、あらゆる点で、前回よりよくなっていました。しかし、結果は逆に悪かったのです。

それは、漢字の覚え方が悪かったというだけのことではありません。もちろん、覚えた漢字の数も少なかったのですが、それよりもなによりも驚いたことは、「あるけ」式指導法には、いままでだれも気がつかなかった、致命的な欠陥があったということです。

子どもたちは知っている漢字をなぜ使わないか

わたしが指導主事をしていたころ、先生がたから、

「テストすれば書ける漢字が、作文にはなかなか使われない。これはなぜだろうか。また、この指導はどうしたらよいだろうか」

という相談をよく受けたものです。わたしは、この原因は、けっきょく、

「漢字は画数が多くて、書くのにめんどうだから知っていてもわざと使わないのだろう」

くらいに考え、そう答えていました。しかし、事実はそうではなかったのです。

なぜかといいますと、「歩け」式のときには子どもたちは、一度習った漢字は、作文のときはもちろん、どんな学科の学習のときにも、かならずこれを使って書いたのです。わすれてしまって書けないときには、かならず質問して教わり、かな書きすることは、けっしてなかったのです。

それは、「橋・箸・端」というように、発音に関係なく、ことばには決まった一つの書き方があって、そう書かなければならぬものと、子どもたちが考えていたためだと思います。極端にいえば、「橋・箸・端」を「はし」という書き方をしたのでは、意味の区別がつかないように、「山は、『やま』と書いたのでは、山の意味を表わすことはできない」と、子どもたちは考えていたのではないか、というように思われました。

だから、まだ教わらないことばを使うときにも、それをかなで書いて済ませる、ということをせずに、どう書くか、ということをかならず尋ねたものです。